

Trinitat

文月りんと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

R・O・D：魔法少女リリカルなのは The MOVIE 2nd Act、機神飛翔デモンベインより本にまつわる作品のクロスオーバー二次小説です。

※本作は文字数の関係で、多少加筆しています。

本作は現在も『Linal Drive』で頒布している作品に加筆、修正を加えたもので、

コミックマーケットなどで頒布中です。

目次

プロローグ	1
1. 機神再動	4
2. 主はやてと守護騎士一同、ロンドンへ行く	11
3. 読子さん、魔導書ですよ。	15
4. まさかまさかの顔合わせ	19
5. 合流	28
6. 召喚	32
7. 介入者	39
8. ナイアの罠	51
9 1. それぞれのエピローグ	57
9 2. それぞれのエピローグ	63

プロローグ

「あーあー。まーた、負けちゃったよ」

黒いナニカが、暗闇の中で囁く。まるでそれは、ゲームを楽しんでいる無邪気な子供のように。まるでそれは、命なんてものを考えもしないまま虫を踏み潰す幼児のように。

「次はどうやって遊ぼうかなあ？」

無邪気な黒いモノは考える。次はどうやって楽しもうか、次は彼らがどこまでたどり着けるのだろうか。そんな事を思い馳せながら…。

「…うーん。思い浮かばないなあ…、そうだ。本でも読むかー」

何も無い空間から本を取り出し、あーでもない、こーでもない等と愚痴を溢しながら読むナニカ。時に笑い、時に泣き、様々な貌をナニカは見せている。

「へえ、アツチやソツチの世界じゃ、こんな面白い事やってたのかー。…あつれ？」

数秒の間の後、すぐに本を放り投げ、ナニカはふて寝してしまった。

「……………なんだよ、また抑止力じみたモノに防がれてるんだなあ！ ふんぷん」

（ツマラナイ、嗚呼、ツマラナイ。なんだって、こいつらが出しゃばってくるのか。…そ

うだ、世界をいつそ面白くするのだから、混ぜたりするのはどうだろう？

きつと、ありえないモノが出てきて、それはそれは面白い世界になるんじゃないのか？ 考えるだけでも、ワクワクしてくる)

急に悪い事を思いついたナニカはすぐに作業に取りかかる。ガサゴソと粘土をこねくり回すように空間を掴んでは混ぜ、掴んでは混ぜを繰り返す。

それはさながら、オーケストラの指揮者のよう。

「やっぱり、混ぜちゃえば面白くなるでしょ？」

……………え？

ツマラナイなんて知らないよ。ボクはやりたくてやるだけだもの」

暗闇の世界が様々な色彩を帯びてくる。

それは、幻想的で、でも破滅的で、ただただ気持ち悪くて。

そんな色とりどりの世界の中心で、黒いナニカは嘲笑う。

……………狂った人形のように。ゼンマイのような音を立てて。

「…でも、こつちだけ強いのも問題アルよなあ。前はこつちが一方的に蹂躪しちやつてつまらない結果になったし、その前は一方的にあちらが強すぎてこちらが瞬殺されたし…よし、決めた！ せつかくだし、ゲストを出しちやおう！ 珍しく大盤振る舞いなんだよ、ねえ、【魔を断つ剣】クン？

…ふひ、ふひひひ。面白くなってきたぞおー」

その日、不思議な世界は創られた。

【混沌】と呼ばれるナニカの手によって。

「さあさあ、開演のお時間です。皆様、映画館で映画を観るようにポップコーンを片手にしても、リビングでゆっくりとコーヒーを片手にくつろぎながらでも、満員電車の移動時間のお供にでも、どうぞご自由にね。ふひひひ…」

「ちよ、は、話せばわか」

ガン!という良い音が鳴り響き、九郎と呼ばれた青年はソファから撃沈した。

青年の名は、大十字九郎。職業は探偵を営んでいる。これでも、混沌と呼ばれる存在から世界を救ったりした過去があるが、現在は依頼される仕事が無く困り果てている状態だ。

「わからん!全くふがいない亭主じゃのう…。なぜ妾はこんな間男を好いてしまったのやら。……………はあく」

溜息混じりの中、珍しく室内にあった黒電話が鳴り響いた。

「はい! こちら、大十字九郎探偵事務所ですが…:…:…つて、あれ? 姫さん?」

九郎の回復の早さに飽き飽きとしながら、「姫さん」と聞いて、様子を伺うアル。

『あら…声だけでよくわかりましたわね。夜分遅くに申し訳ありませんが、少々立て込んでおります、可及的速やかにお仕事のご依頼があります』

「仕事のご依頼なら、二十四時間いつでも受け付けてますから、ご安心を! 姫さんの依頼だったら、例え火の中、水の中、混沌の中、どこへでも参りましょう!」

『ほー。…どこへでもですか』

『??? ……ええ、どこへでも』

「お、おい、九郎、さすがにどこへでもってのは難しいじやろ?」

自分の指で耳をほじりながら、アルはつぶやく。

「だーっ、うるせえ！ 仕事の話してんだから、少しは静かにしてくれっ」

『えー、オホン。よろしいでしょうか？』

「ああ、姫さんすまねえ」

依頼は、以前九郎達が戦った逆十字（アンチクロス）が使用していた魔導書の写本が発見されたというのだ。発見場所はアーカムシティ内ではなく、ヨーロッパに存在する某国内で、霸道財閥による調査、回収作業が行われたものの、先行して潜入した連絡員からの連絡が途絶え、更に再調査に向かった別働隊の連絡も途絶えたという。最後に連絡があつた際に伝えられた言葉はただ一言。

「強固な境界がジャマをして…、なんだアレは!? …うわあああああ!!!」

「そんな事あつたのか。アーミティツジのじいさんはなんて言つてたんだ？」

『そもそも事の発端は、アーミティツジ様からの連絡で魔導書が見つかったという連絡を受け、私も調査を行いはじめたのです』

「へー。珍しいな、あのじいさんからの連絡からコトが始まるなんて。大方、ラバン先生から經由なんだろうけどなあ…」

『それも想像はできますね。とりあえず、これ以上の長電話をするのは大十字さんのお隣の部屋にも迷惑になりますし、オーダーを伝えます』

「ああ、悪いな姫さん」

『それでは、大十字九郎さんと、そこでナイムネのくせして、牛乳飲んでる古本女に正式な依頼です。【魔導書を確保、及び、邪魔をしてる悪を壊滅させて下さい】！』

「了解だ！ ……で、お代は先に半分を先払いでおおおつ！」

『い、如何しました!?まさかもう敵の攻撃ですか!』

仁王立ちで九郎の前に立っているアル。

「おい、九郎。今、なんか電話越しに“ナイチチ”という単語と一緒に妾の耳に入ってはならない単語が二、三あったようだが…」

「い、いえ、姫さん、なななんでもございませせんよ。あは、あは、アハハハハハ」

「そんなわざとらしい笑いなんぞしおつても、さっきの小娘の声を聞こえていなかったと思うのか? 聞こえてないと思うてか? いや、聞・こ・え・て・た。 ……この痴れ者があああああ!」

「あ、アルさん、そんなどこぞの格闘家が気を溜めて出す超必殺技を放つ態勢で何を放つっていうんですか! さっきの発言者は俺じゃないんですけど! ねえ、もちついで、アルさーん!!」

『オホホホ。なんだか、いつもの夜の営みがあるみたいですし、そろそろお電話切ります

ね、また追って連絡致しますわ。それではごゆっくり〜』

ツーツーという音と共に、切れた。あっさりと言電話が切れた。

「え？ちよ、ま、まだ話が途中じゃないですかー、あれ？ひ、姫さん？姫さーん」

「……………ぐぬぬ、妾の怒り、どこにぶつけようかつ」

アルの顔が九郎の方を向く。

「…九郎、お前にぶつけてやる、覚悟せいっ！」

「そんな妄想トリガーは結構ですっ！」

目の前が光り出す。だが、部屋の被害よりも、これで気絶すれば空腹を耐え無くて済むんじゃない？ と思っただからこそ、アルの攻撃をあっさりと受け入れる九郎だった。

「はあ……………全く地獄耳なんですから」

瑠璃は、窓越しに街の一部で煙が上がるのを自室から確認し、持っていた受話器を置いた。すぐに真正面に顔を向け、そこに立ち会っていた第三者に話しかける。

「さて、これで宜しいですか？ アーミティツジ様」

瑠璃が座っている向かいには、邪悪と戦う一人として、齢を重ねた今も戦い続けている老人が座っている。

「こんな夜分遅く、霸道財閥の総帥の眠りを妨げ、あまつさえ下手な芝居までさせてし

まっつて本当にすまない」

「そ、そんな、私が調査を行ったという事実はありませんが、魔導書が発見されたというのは事実なのですし。一応、アレでも世界を救った人達ですから、少しはお仕事もさせてあげませんと」

「はっはっは、そうじゃな。それでは、お言葉に甘えるでしょうか。ラバン教授からの連絡というのは本当じゃからのう。信憑性についても、魔導書が発見されたイギリスにいる知人というか、ワシの恩師から聞いて、確実な情報じゃしな」

「判りました。それでは、ウインフィールド」

静かな室内にノックが二回、鳴り響き、ドアが開く。

「失礼します、お嬢様。そして、アーミティツジ様」

主人と客人にそれぞれ深々と礼をした執事こと、ウインフィールド。

「大十字様やアル・アジフ様が必要な経費や、念の為、鬼械神（デウスマキナ）の発進準備などは私やチアキなどで行っておきますので、ご安心を」

「よろしい」

瑠璃とウインフィールドの会話を見て、満足したアーミティツジは席を立った。

「それでは、ワシはこれで失礼する」

「まだ、ごゆっくりされても、当家は問題ありませんのに」

瑠璃も礼儀とばかりに席を立ち、見送ろうとするが、

「いやいや、ここで結構じゃ。老人を構うよりはゆつくりと睡眠をとって下され。御身はただ一つなのじゃから」

「は、はい…」

ウインフィールドが一步前へ出て、ドアへ先導する。

「こちらです、アーミティツジ様」

「うむ」

その様子を見ていた瑠璃は老人とは思えない程に堂々と歩くその姿に改めて驚いた。

「……………しかし、イギリスにいらっしやるアーミティツジ様の恩師だなんて、一体、何歳でどなたの事なんでしょう?」

2. 主はやてと守護騎士一同、ロンドンへ行く

「なー、はやてえー。ここが本当にロンドンなのか？」

ロンドン市内を歩く一行。

パンクロックを思わせる黒いTシャツにチェックのスカートを身につけた赤い紙の少女が隣のはやてと呼ばれた黒髪の少女につぶやく。

飛行機に乗っていた時間があまりに長かった為、ふてくされる赤い髪の少女。少女の周囲には、笑顔を絶やさない金髪の女性、周囲に気を配りながら警戒しているスーツ姿の男性と女性が一人ずつ。

「ちよつとは静かにしてえな、ヴィータ」

「全くさ、どんだけ飛行機つてのに乗んだよ！ あたし達なら【魔法で飛んでった】方が早いのに!!」

「こ、コラ！ ヴィータ、やたらと【魔法】とか言わんといてー！」

【魔法】という発言をしたのを注意しながら、周囲をキョロキョロと見回したが、幸いにも周りの客には聞こえていなかったようだ。

「…なあ、ヴィータ。あまりにうるさいようなら、少し黙っててもらうよ？」

はやてはそれまで読んでいた本を閉じ、ヴィータに笑いかけた。

「か、顔が笑ってないよ？ おーい、はやてさーん……」

「ええ？ よく聞えんなー。ほら、笑ってるよー」

「……ま、まあまあ」

二人でもない声がはやての胸ポケットから、聞こえてきた。

「落ち着いて、はやてちゃん」

「なんや、リイン。私は注意しようとしているだけなんやけど」

ひよっこりと現れたのは、女の子と呼ぶには小さすぎる大きさだった。さながら子供が遊ぶような人形サイズだ。

「まーまー。ヴィータちゃんもココは、家の中じゃないんですから、少しは静かにして下さい」

「うう、わかったよ、リイン。はやて、わりい」

「……………。わかったんなら、ええよ。なー、シグナムも忠告してえな」

「主はやて、あまりヴィータを怒らないでやって下さい。ヴィータはヴィータなりに、今日の旅行を楽しみにしていたのですから」

シグナムと呼ばれたスーツ姿の女性が答える。

「まったく。おい、ヴィータ。大方腹をすかせているんだろ？」

忠告をするスーツ姿の男性こと、ザフィーラ。

「だって、この国のご飯、あんまり美味しくないんだろ？　はやての和食がまた食べたいよー。はあ…」

ヴィータは溜息を交えながら、答えるのだった。

過去に発生した【闇の書事件】。その事件の中心人物となった、八神はやて。そして、はやてを守るヴィータ、シグナム、シヤマル、ザフィーラ、リインフォースIIこと、守護騎士【ヴォルケンリッター】。事件は高町なのはを始めとする時空管理局の関係者達、そして守護騎士自身の活躍によつて終結した。はやて達は自分たちで犯してしまった罪を償いながら、保護観察という扱いで日常を過ごしていた。

そんなある日、現在の上司でもあるレティ・ロウラン提督から日々の功績を讃えられ、能力の制限はあるものの旅行を許可されたのだった。

「なあ、みんな。あたしら、今も監視されている身とはいえ、やーつと骨休めできるんやし、楽しくすごせなあかんよ？」

「はい、主はやて」

シグナムはすぐに答える。

「そういえば、レティ提督に貰った旅行のチケットと一緒に入ってたこの写真なんなんやろな？　本だけしか写つとらんけど。パッと見たら『夜天の書』みたいや」

時、知るよしもなかった。実はこの本がはやて達にとって、今回の英国旅行で危険を及ぼすことになるとはその

3. 読子さん、魔導書ですよ。

日本には古書街がいくつもある。その中でも、世界的に有名な街、神保町。そこに住むとある蔵書狂（ビブリオマニア）が、英国にある大英図書館、特殊工作部に所属するエージェントで尚かつ、自身の能力によって一度、世界を救っているという事を皆さんはご存じだろうか？

非常勤の高校教師でもある、その蔵書狂のコードネームは「ザ・ペーパー」。紙という名の如く、「紙使い」である。性別は女性なのだが、化粧もろくにせず、髪は寝癖がつき、見てくれは酷いモノ。蔵書狂の名については、本好きがこうじて、本屋を丸ごと買うといった、店舗購入を何度も経験している筋金入りの蔵書狂だ。

だが、ひとたび紙を持たせると、時には敵を駆逐する武器に、時には万能な乗り物にと、コードネーム通りの能力者となるのだ。

そんな彼女が関わった「稀覯本奪回・偉人殲滅作戦」から数ヶ月が経過し、読子はただ本を読むだけの自堕落な生活を再開していた。

ある日、読子はいつものように神保町にある古書店で本を手にとって、立ち読みをしていると、携帯電話が振動した。

「はい、もしもし」

『……ああ、読子、お久しぶりです。ジョーカーです。相変わらずの生活を送っているかと思いますが、お元気ですか?』

本の文章に目を動かさないままで読子は電話に応えた。

「はい! ジョーカーさん、お久しぶりです。いかがお過ごしですか」

『それは、こちらの台詞です。読子、今すぐにイギリスへ帰還して下さい』

「はあ…。でも、この本を読んでからでもいいでしょうか?」

『…読むのは構いませんが、貴方はもつと余裕を持って対応ができないのですか』

ジョーカーの様子からただ事ではないと受け取れるのだが、目の前の文章の続きが読みたくて仕方がない。

『すみません、今、すごく良いところなんです』

「…ふう、いいでしょう。読みながら構いませんから、耳を傾けておいて下さい。一ヶ月程前に、我が英国の国内でとある本が発見されました』

「本っ!!」

【本】という言葉も聞いても、読子は目に映っている本を読むのをやめない。

『読子、落ち着いて下さい。いいですか、話を続けます。その本はただの本ではなく、魔導書と呼ばれる本です…。私自身あまり信じたくないのですが、この本を所持した者

は魔法が使えると伝承されている代物なのです』

「まほう、ですか…」

『ええ、魔法です。その魔導書の中でもクラスの高いモノは、自ら意志すら持つとか』

「…なんだかオカルトじみてますね。その本」

『私からしたら、貴方の存在もオカルトじみてますよ』

「そおですかあ？」

そう言いながらも読子の表情は変わらない。

『はい。それで我が大英図書館特殊工作部としては、…その本の確保を命じます』

「…ちなみに、その本は私でも読む事ってできるんでしょうか？」

数秒無音状態が続いたが、すぐに返答があった。

『ん、ウエンディ君そこらへんどうですか？』

ジョーカーは近くで待機していたウエンディに聞く。

『ウエンディです。読子さん、その本は多少なりとも魔力が無いと開く事すらできない

そうですよ』

「魔力ですかあ。私、そういう類いは持ち合わせてないので読めませんね…」

溜息をしながら、本当に残念がる読子。

『読子、既にそちらまで迎えが行っているはずですよ。少しでも早く行動して下さい』

「わかりましたあ〜」

通話をしている間も持っていた本を読み続け、通話と同時に読み終えてしまった。

「ああ、魔法かあ…。私も一度でいいから変身したりしたいなあ…。」

「おい、おまえはそんな少女趣味じゃないだろ」

後ろから男の低い声がする。振り向くと見知った顔だった。

「あつ、ドレイクさん！」

「ばあつと顔が明るくなり、読子は笑顔になる。」

「ようやく見つけたぞ。この街も狭いようで複雑だからな。GPSを装備しててもな、おまえの位置がわかりづらいんだよ！ さあ、出かける準備しろ」

「苛つきながらも、踵を返して先行するドレイクだったが、読子についてはいこうとしな
い。」

「おい！ 早く来い！」

「嫌です！ちよつとだけ待ってて下さい！」

ドレイクが進んだ方向とは逆のレジがある方向へスタスタと歩いて行く読子。

「何い？」

店主の目の前まで歩いて行き、両手をあげながらこう言った。

「ご主人、私こちらのお店の本を読み足りないのでゼーンぶ下さい！」

4. まさかまさかの顔合わせ

「ん〜っ！ようやく着いたー」

両腕を上げ、大きく伸びをしながら、ヴィータは笑顔になる。

「ここがイギリスでも有名な古書街かく。なあ、はやて、あっち見に行こーぜ！」

「ちよつと待つてえな、ヴィータ」

ヴィータに急かされ、はやても早足になる。はやて一行はロンドンから少し離れたこのハイ・オン・ワイにやってきた。

「シグナム達はここで待つといて」

「わかりました。ヴィータ、主はやての警護任せたぞ」

シグナムやシャマル、ザフィーラの三人は周囲を警戒している。

「わかつてるよ！あたしだって、守護騎士だけ？」

「主はやて。ご自身もどうぞお気をつけて下さい」

シグナムは心配そうにはやてを見つめる。

「ああ、わかった、わかった。大丈夫や。私かて、もう魔法少女なんやで？」

「そうです、はやてちゃんは私がしっかりと守ります！」

はやての胸ポケットからラインの音がする。

「ああ、そうだったな。それでは主はやて。また後ほど、お会いしましょう」

「ほなな、また後でな」

シグナム達と別れ、ヴィータとはやては歩き出した。

「さて、あの画像に添付してあった本、ホンマにここにあるんかな？」

「考えても仕方ねえだろ、下手したら『ロストログア』らしいんだからよ」

「困ったもんやね。すぐに見つかるといいんやけど……」

キヨロキヨロと辺りを見回すはやて。

「んんー、私の勘からしたら、あつちの路地裏に秘密の本屋さんがあつたりするんやない

かなーとか思うねんけど……」

「試しにのぞいてみようぜ」

路地裏に行こうとした直前に、曲がり角から本を片手に読みふけりながら人が出てきた。

「……つと！ ぐ、ごめんなさい！」

「……………」

「なあ、あんた聞いているのか？ おーい」

「……………」

「こらヴィータ、初対面の人にあんたなんて言うもんやないの。あれ？　あなたは…
よ、読子先生!」

「はい、読子です！　あれ？　あなたは、八神はやて、さん？」

流石に本を読む手を止めて、読子は呆れた顔をしていた。

「そうです、はやてです。先生、なんでここにいらつしやるんですか？」

「はやてさんこそ、どうしてここに？」

「ええつと、どう説明したらええんやろ…」

「そうでしたか、では、こちらに住むおばさんに呼ばれて一家で来られたんですね」
嘘をつく形となったものの、読子にどうしてここにいるかをはやては説明した。

「そ、そうなんです。この場所に來たついでに探してほしい本があるって言われて、姉や妹たちで探しているところなんですわ」

「そうそう、なかなか見つからなくてな」

うんうんと頷きながら、ヴィータも同意する。

「ちなみにどんな本を探しているんですか？」

読子は興味津々で質問を投げってきた。

「え、えつとー」

「…なあ、はやて。せつかくだからこのせんせーにも手伝ってもらおうぜ」

「ヴィータ、それはいくらなんでもダメやろ、私らだけで探さんと怒られるで…」
はやてはウィンクを投げかける。

「そ、そうだな。あたしらだけで探さないとな！　つてワケで、読子せんせー、あたしらはここで別れだ」

「…わかりました。この街は広そうでも実は狭いと思いますから、また日本でお会いしましょう」

寂しそうな顔をしながら、読子はカートをガラガラと引いて行ってしまった。

「ふう…、危ないなあもう…」

見送って、安堵する二人。

《どうかしましたか、主はやて》

テレパシーでシグナムが声をかけてきた。

《実は学校の先生と、ぼったり出くわしてん》

《なんと。ん？　ここはイギリスでは…》

《そうなんよ、偶然鉢合わせ。普段から本だけには目が無い先生やからね、それにしても、まさかおるとは思ってたわ》

《以前から、話があった変人先生でしたか。ですが、話を聞いている限りでは、悪い人ではなさそうですか…》

普段の読子は、地味で暗そうな印象だけど、教えてくれる教科はわかりやすいと評判だった。その事を思い出すはやては、自然と顔が笑顔になっていた。

《…そうやな。まあ、また日本で再会するからええんやけど》

はやてとヴィータは、気になっていた本屋の前に来ると、そこで男女の兄妹がいがみ合っているのを見つけた。

「じゃから、今度こそ、ここから魔導書の匂いがするって言うてるのに、何度言ってもわからんのか、この大うつけ！」

「あーもう、知らねえよ！ 古本娘！ おまえのその匂いつてのを頼りにきたはいいが、もうこれで何度目の間違いだよ？ 入った先々で店主に怒られるわ、探してるもんじゃない贋作を買わされるわで、もううんざりだ!!」

「お主が金を払うのでは無く、あの小娘のプラチナムカードとやらで支払いをしとるんだらうから、別によいではないか」

「いや、今の手持ちが借りたこのカードしかねえけど、結局報酬から天引きされんだぞ？」

「むゝゝ!!」

額と額を合わせて、キスでもしそうな距離なのにイーツとにらみ合う二人は痴話ゲンカをしているようにも見えた。

「なんやろね、アレ」

「さあー」

店先でのやりとりに呆れながらも、はやてとヴィータはそつと二人の横を通過していった。

「だーかーら、これで終わりにすると………ん？」

「どうした、アル？」

少女の顔がはやてとヴィータがいた場所へ振り向いた。

「いやな、魔術師の気配がしたんじやが……。でも、これは………、うーむ」

アルは、腕を組んで考え込んでいる。

「おい、魔術師って、今誰か通ったのか？」

「はあ…、お主は、これだから……」

やれやれといったジェスチャーをしながら、アルは大きな溜息をついた。

「変な本は多いけど、なかなか無いもんやなー」

はやてとヴィータは店内の本を隅々まで調べていた。

「けほけほ。なんや、すごいホコリやね」

「カビくつせー本ばっかだな、この本屋」

「せやねー」

古書店特有の匂いになれない二人は、何百冊もある中から一冊の本を探すのに落胆していた。

「なあ、はやて、コレじゃないのか？」

ヴィータは適当に近くの棚にあった本を取りだし、はやてに見せつけた。

「ヴィータ。それ、全然ちやうよ？」

「そうか、あたしにはどれも同じに見えちやうからなあ」

「せやろね。ヴィータはいつもマンガばかり読んでるから」

「な、なんだよ！ マンガは面白いんだよ！ 特に最近『世界のイジン』って本が面白くて！」

「……………あ」

少し怒り気味のヴィータの顔を見ていたはやては、急に顔をあげる。そして、ふらふらと歩き出した。

「どうしたんだ？ はやて…」

はやては立ち止まる事無く、店の奥へと進むと、おかしな形のドアの前で止まった。

「みつけた…」

ドアは勝手に開くと、はやてが暗闇へ飲み込まれていった。

「お、おい！ はやて、待てよ!!」

ヴィータも駆け足でドアの前に向かう。ドアを開けようとドアノブに手をかけひねると、開かない。ガチャガチャと何度もドアノブをひねっても、鍵がかけられているうだった。

「なんだよ、これ…、悪い冗談はよせよ、はやて〜！」

何度もドアを叩くが、はやてから返事がない。明らかにおかしいと思つたヴィータは、少し自分の手に魔力を込め、ドアを無理矢理開けようとした。

そんな時、鍵が外れたような音と共にドアが開き、はやては一冊の本を片手に帰ってきた。

「!!? はやて、その本…」

「そーやー。この本やろ?」

はやてはこちらに顔を向け、受け答えするものの、目はこちらを向いていなかった。

明らかにおかしい。魂が抜けた人形のようなうだった。まるで、本にガツチリと、とらわれているような印象を受ける。

「な、なあ、はやて。それ、ヤバイ代物だから、あたしに寄越せよ?」

「なにするんや! ヴィータ、いくらあんたでもコレはダメやで!」

はやてから問題の本を奪おうと手を伸ばすも、がっちりを掴んで話さない。ヴィータはただならぬ不安を感じてきてきた。

「さあ、せつかくやし、開いてみよか？ ……」

はやては呪文を詠唱するようにブツブツと言葉を話し始めたが、目の前にいるヴィータにも聞き取ることができない。

「おい、はやて！」

いよいよ、実力行使をしようとしたその瞬間、本から黒い霧のようなものが一気に吹き出した。瞬きをしたそんな一瞬に、空間をゴツゴツと変えられたような感覚が襲う。

はやてがいた場所をのぞくと、本から大きな鎖が出ており、はやては絡め取られていた。

「畜生、これじゃ、あの時みてえじゃねえか！ アイゼン！」

ヴィータは胸にかけていたペンダントに話しかける。

『Jawohl（了解）!!』

5. 合流

「ん…んう」

「あ。目が覚めましたね」

聞き慣れない声がしてゆつくりと目を開ける。

「あれ？ あんた…たしか」

「はい、読子。読子・リードマンですよ。ちよつと待つてて下さいね」

「シヤマルさん、ヴィータちゃん、起きましたよお」

「はーい！」

今度は聞き慣れた声がしてきた。

「シヤマル…。ここって…」

確か自分のはやと一緒の本屋にいたはずだ。なのに、今いるのはチェックインしたホテルの一室だった。

「よかった。ヴィータちゃんが無事で」

シグナムとザフィーラも駆け寄ってくる。

「大丈夫か」

ザフィーラが優しく声をかける。

「…ああ、大丈夫、だつててつ」

「あまり無理をするな。人間ならばおそらく致死量に匹敵する電撃を浴びたのだぞ」

「そ、そうか…。…そうだ、はやてつ!!」

ヴィータははやてが部屋の中にいないことを思い出すと、急いで起き上がる。

「やめろ。主はやては何者かに連れ去られた」

ザフィーラがヴィータの肩をつかむ。

「おい、なんだよそれ!!」

「……………」

シヤマルもシグナムも落胆していた。

「どうして落ち着いてられるんだよ!! すぐにでも助け出そうぜ! なあ、あたしら守

護騎士じゃなかったのか!!」

「落ち着いて、ヴィータちゃん!!」

シヤマルが一喝する。

「そうそう、落ち着かんとこれからの話できんじやろ?」

モグモグと何かをほおぼりながら、アルが部屋の隅から現れた。

「おい、アル! 勝手にホテルの冷蔵庫から、メシ引つ張り出すなよ!」

よく見ると昼間本屋の前で痴話ゲンカしていた兄妹だった。

「おまえら……」

「おつ、起きたみたいだな。自己紹介しとこう、オレは大十字九郎。こいつは嫁のアル」
「よめえ？……」

アルと九郎の顔を見比べる。

「どうみても、兄妹とかが限度だと思うぞ……」

珍しくヴィータが冷静にツツコむ。

「ほれ、ちゃんとした挨拶をせんから、誤解を招くのだ。ワシはアル・アジフ、またの名を「ネクロノミコン」という。こう見えても、汝よりは年上じやから、敬えよ、小娘」

「【ネクロノミコン】って、超有名な魔導書じゃねえか！」

ヴィータは開いた口が塞がらない。

「でも、あたしを小娘って呼ぶのに、背丈じゃ同じくらいだろ？ ……一体、何歳なんだよ」
「デリカシーのないやつじやのう。女に年齢は聞くんじやなかるうて。カツカツカ」

「……で、そのお二人がどうしてここに？」

ヴィータは溜息を混じらせながら、会話を続けていく。

「実は同じ本を探しててな、そこに出くわしたのがあんた方だったってワケだ」
「なるほど」

事情を伺い、ある程度飲み込め始めたヴィータだった。

「なあ、シヤマル。はやと通信はできないのか？」

「残念だけど、ヴィータが気絶してる間も何度もやってみたけれど、変な壁みたいなものがあるのか、連絡が取れないのよ」

シヤマルは苦虫をつぶしたような顔を浮かべた。

「そうか…。そういや、さつき読子せんせーがいたけど、なんであの人が？」

「案ずるな、赤いの。それについても説明をしてくれる輩が来る頃じゃ」

アルは腕を組みヴィータに伝えると、すぐ近くの部屋の壁から手が生えてきた。

「は？…：手エエエエエ!!？」

後ずさるヴィータを余所に、花が咲くように女性が現れた。女性はピッチリとしたラバースーツを身にまとった妖艶な姿をしている。

「…ふう。こういうのも慣れないわね」

「今度は誰だ!？」

驚くヴィータを余所に、女性はしやべり出した。

「あら、可愛い子ね。私はナンシー。ナンシー・幕張よ。大英図書館でエージェントをしてるわ」

6. 召喚

礼拝堂で掲げられた十字架を見ている老年が立っていた。十字架にはキリストでは無く、全く違う歪なナニカが身体を貫かれている。

「ナイア神父、準備整いましてございます」

跪いたジエンナーは深く礼をする。

ナイア神父と呼ばれた男は、人では無かった。だが、誰に知られる事無く、この島へ居座り、誰に疑問がられる事無く島民を操り、そして改造していった。

「ありがと。君達、新しい偉人軍団の調査も、この島の島民がいなかったら今頃、頓挫してただろうね。もつとも、調べた人間は僕の遊び道具になって、自壊しちやっただけだよ。ハハハ」

「……………」

ジエンナーは何も言えなかった。

礼拝堂の地下に奇妙な洞窟があった。洞窟の中に何千人という人ならざるナニカが、うごめいていた。

「た、しけて…」

「もう死に、たいよう…」

「殺してくれー!!!」

地獄絵図とはこのことなのだろうか。そんな中央部に小さな椅子と、八神はやてが座らされていた。

「……………」

はやての目は虚ろなままだ。

「はやてちゃん！ はやてちゃんつてば！ 起きて下さいー！」

ポケットに隠れたままだったラインはこの場所へ連れられてきてから、何度もはやてを呼び掛けた。

「なんやあ…」

時折、反応があるかと思えば、やはり抱えている本に囚われているからか、反応うすい。

「どうしましょう…ワタシ一人じゃ…」

他のヴォルケンリッターにテレパシーを送れないかも試してみたが、強力な結界がこの島を覆っているらしく、連絡が取れない。

「人形がペチャクチャと喋っちゃダメじゃないか？」

「きやつ!!」

ひよいっとはやてのポケットからリインが放り出された。

「いたたっ」

上を見ると、そこにいたのはナイア神父だった。パチンと指を鳴らすと、ぼすつという音と共にリインは気絶した。

「ふむ。面白い形状をしているが、所詮はこの程度か。さあて、これで…準備は整ったかな。あとは君達が来るのを待つばかりだね？」
【神をも断つ剣】クン」

連れ去られたはやては、ヘイ・オン・ワイから百キロ近く離れた海上にある、地図にもない島だという事が衛星からの調査でわかった。しかしながら、正しい場所までの特定には至らなかつた。そして、ヴォルケンリッターの面々、そして、九郎とアル、大英図書館特殊工作部の一行は霸道財閥が用意した船に乗船し、問題の島まで近づいていた。

「…なあ、シグナム。あたしらの場合、やつぱ空飛んだ方が早いんじゃないのか？」

ヴィータは隣にいるシグナムに対してぼつりと愚痴をこぼす。

「確かにそうだが、今回ばかりは一筋縄ではいかない敵が待ち受けているかもしれん。仮にお前は敗れたのではないか？ …体力は温存しておけ」

「わーつたよ、いくらシャマルの治癒魔法をもらってるからっていつても、もしもの時に大技を出せなきゃダメだしな」

ペンダントになつたグラブアイゼンを見つけていた。

ホテルで読子も大英図書館特殊工作部の一員だという事を聞き、驚いたものの彼女が紙を使つて、折り紙を作つたのを見て信じたことにした。その場にはいかなかったが、後ほど合流するドレイクという男の説明もあつた。その後、はやてを誘拐したワットは九郎の手で倒されたという事を聞いた。しかし、次の刺客としてジェンナーが現れ、はやてを連れ去つてしまつたという。

「ホントすまなかつた。謝つてもこればかりは変わらねえんだが、オレの気持ちの問題だからな」

話の最後、九郎はヴィータや他のヴォルケンリッター全員に対して、謝罪した。

「…もういいよ。それに次はあたしも本気出すから」

ヴィータから真剣な表情を返され、九郎は笑みをこぼした。

「わかつた。宜しく頼むぜ、守護騎士さん。オレも次は全力だ」

「…さて、そろそろ問題の場所へ到着よ」

ナンシーが皆に声をかける。周りを見ると、全員がそれまでとは異なる姿へ変身し、臨戦態勢となつていた。

「何が出てくるか判らないわ。力はなるだけ温存しておいて」

「バックアップは私とザフィーラがします。とりあえず、目の前であろう結果を

破壊することを最優先で対応しましょう」

「オオオオオツ!!!」

ザフィーラが結界前で雄叫びをあげ、結界に殴りかかった。

『チツ、なんて堅い結界だ』

九郎達は遠くに船を止め、上部甲板から様子を見ていた。

「ザフィーラ、選手交代よ。やっぱりアレを打ち破る術式を撃てる魔術師が出番みたい」

「了解した」

シャマルの声でザフィーラはその場を離れた。

「…なら適役は大十字クンとヴィータちゃんね、あとは任せたわ」

ナンシーはそう伝えると、甲板を透過するようになくなった。

「よっしやーあ!! オレ達が最初から本気だつていうのを見せつけねえとな、いくぜア

ルー!」

マギウススタイルの九郎が吼える。

「応よー!」

それにアルも続いた。

「憎悪の空より来たりて…」

「正しき怒りを胸に…」

「我らは魔を断つ剣を執る！」

「汝、無垢なる刃！ デモンベイイイイン!!」

二人が言葉を紡いでいくと、雲が割れ光の中にデモンベインと呼ばれた巨神が顕現した。

「うお!! でつけー。なに、あのカッターロボットは!!」

空中に浮かんだヴィータが興奮している。

『へへっ。こりやな、鬼械神（デウスマキナ）ってんだよ』

「ふーん。じゃ、あたしのグラーフアイゼンと破壊力勝負としゃれ込むかい？」

九郎のにーちゃん！」

『おう！望むところだ！ シャンタク!!』

そう九郎が伝えると、デモンベインは背中から羽を生やした。

一人と一機は必殺技のモーションへ入る。

『いくぞおアル!!』

『応!』

「グラーフアイゼン！ ロードカートリッジ!!」

ヴィータも負けじと叫ぶ。

『Explosion. Rocketenform.』

「ラケーン、ハンマアアアアアアー!!」

『『アトランティス、ストラアアアアイク!!』』

同時タイミングで、分厚い結界に着弾する。ビシッという音が聞こえると、ガラスが砕け散るように崩れ去った。

『いよおっし!』

「やったな、九郎のにーちゃん!!」

『ああ! しかし爆発力がすげえな、そ…』

会話の途中で、デモンベインの背中が大爆発を起こした。

『あんだあ!』

『九郎、上を見ろ!』

アルからの言葉で顔をあげると、九郎は絶句した。

『……………な、なんで、アイツがココにいる?』

この場所にいるべきのない、もう一体の鬼械神、リベル・レギスがそこにいた。

7. 介入者

『…やあ、大十字九郎お。そして、アル・アジフウ』

『ん？ 誰だ!? マスターテリオンじゃ、ない!?!』

『…ああ、そのようだ』

聞き覚えがあるが、九郎もアルも思い出せない。でも、仇敵であるマスターテリオンとナコト写本でないことがわかる。説明はできないが、九郎とアルは脳がそう理解していた。

『おい、赤いの。ここはオレらに任せて、お前ははやてちゃんを助けてこい』

「え？ でも…、いいのか？」

『いいもなにも、こればかりは譲れねえんだ』

デモンベインの顔がヴィータへ向く。コックピットの中はわからない。けれど、真剣な声で話す九郎達から「早く行け」なんて言われているように思えた。

「……………わかった。死ぬなよ」

ヴィータは背を向けて、はやてのいる島へ移動した。

『…さて、いっちょ行きますか!!』

『応!! ぶちかませ、九郎!!』

『だありやああっ!!』

デモンベインは大きくパンチを振りかぶり、リベル・レギスに突撃していく。

だが、パンチは空を切った。

『おいおい、今日はこんなんばつかだな!』

『グチるでない! 右だ!』

『おおおおおおっ!!?』

かろうじてガードするもデモンベインが大きく揺れ、九郎は苦悶の表情を浮かべた。リベル・レギスの反撃として、水平蹴りが飛んできたのだ。

『どうだあい、この蹴りはあ。必殺技は流石に再現出来なかったけれどおも、君達を倒すのなら、この程度で充分だああああつ』

『気持ちの悪いいやべり方だな! …悪いがオレ達にはそうやって余裕かましてられる程の時間的な猶予つてのがないんでな、すぐに決めさせてもらうぜ!!』

『ああん?』

『アトラック!!ナチャツ!!』

デモンベインの頭部から、蜘蛛の巣が出現する。

『その程度おの術式などお!!』

リベル・レギスは腕を組み、その場で待機しているとあっさりと捕縛されてしまった。
『なにいつ!!』

『アイツ、バカか? …まあ、いい! 一気に決めるぜ!!』

デモンベインの右手が光り出す。

『オオオアアアツ!! 光射す世界に! 汝ら暗黒棲まう場所なしツ!!』

デモンベインが空中を奔っていく。

『渴かず、飢えず、無に還れツ!!! レムリアツ、インパクトオオオオ!!』

デモンベインがリベル・レギスの胸元に拳を叩きつける。

『昇華!!』

『なんだとおおおお!!!』

アルの一喝で、デモンベインがリベル・レギスから離れると、その空間が消失した。無事にリベル・レギスを倒したことを確認する。

『うっしや。なんだって今みたいな亡霊を見せんだらうな?』

『そうぼやくな、九郎』

『ま、そうだな。あ、今の声って、アウグス……、いやなんでもねえ……』

九郎は以前戦った敵幹部の名前を言いかけたが、結局やめた。その程度の輩だったというのも思い出したからだ。

『…さて、三下程度に大技を使ってしまったが、下のあちらは大丈夫かろう?』

『まあ、平気だろ』

『そうそう、あんまり細かいとお、背中から刺されちゃうよ?』

『!!? 今の声は!!』

リベル・レギスがいた空間を改めて見渡すと、今度は白のリベル・レギスが現れた。

『はあい。愛しの九郎くん。そして、ギーきげんよう、アル・アジフ』

『今回も貴様が元凶か! ナイアルラトホテップ!!』

デモンベイン越しにナイアを睨みつける九郎とアル。

『ご明察ー。どう面白かったでしょ?』

『全然つまんねえもん作りやがるな、相変わらず』

悪態をつきながら、九郎は今の状況の最善策を考え始めた。

『それは、それはお褒めの言葉として受け取っておくよ』



先に小型船で上陸したナンシーと読子は辺りを見回す。

「怪しげな島なこと。まずは入口を探さないとね」

「ナンシーさあん、この島、なんだか気味が悪いですよ」

読子はナンシーにべったりとくっついて、行動している。

《読子、聞こえるか?…》

そこにドレイクから無線が入った。

「ドレイクさあん、どうですか追加の紙は?」

《ありつたけ用意してきた、あと三分で現地に着く。だから、もう少しだけ待ってろ》

「はい」

「行くわよ、読子! あんた教え子を助けたいってこつそり言つてたじゃ無いの」

「お涙頂戴ですかあ、特殊工作部のエージエントさん」

「!!」

驚く読子とは対照的にナンシーは拳銃を構えた。

「そこね!」

挨拶代わりに一発お見舞いするが、周囲に溶け込んでいるからか、

あつさりと外れてしまった。

「誰ですか?」

「こんばんわ、新生偉人軍団が一人、ジェンナーです」

カメレオンの力がなくなつたのか、ジェンナーは目の前に現れた。すぐに異なる注射器を取り出して、首に突き刺す。すると、鳥になつた時のようにボコボコと身体が変化し始めた。

「これはこれは…私は読子ですう」

「コラ！ 読子、そんなヤツに挨拶なんてすんじやないの！」

お辞儀をしている読子を突き飛ばして、ナンシーは何発も銃撃を浴びせる。

「読子！ こいつはあたしにまかせてあんたは、はやてちゃんの救出に行きな！」

「でも、それじゃナンシーさんが…」

「そうですよお、あなた死ぬ気ですかあ？」

銃弾に倒れたはずのジエンナーが、起き上がった。

「なっ!？」

「驚くのも無理ありませんね、さてコレじゃ私を倒すのは到底無理ですよ？」

銃弾を受けた場所が盛り上がっている。弾丸が貫通せず固い甲羅のような細胞が受け止めていた。

「お返ししましょう、プツ!!」

身体についていた弾丸を口に含むと、ジエンナーはナンシーに吐き出した。速度もナンシーが撃った拳銃と同じ速度だ。

「危ないわね！」

ナンシーは後ろに宙返りでよけると、頬から血が垂れてきた。どうやら敵の攻撃が掠ったらしい。

「女の顔に傷をつけるとはふざけたやつね！」

「なんとでもいいなさい、プツ！ プツ!!」

ナンシーは、ジェンナーの唾弾丸をひらりとかわしていく。

「どうです？ 私の身体は今、様々な動物達の能力が備わっているのです！」

「あーやだよだ。こういう自意識過剰なオトコって…」

ジェンナーの様子を見て、ナンシーはうんざりとしてしまった。

「読子、行きなさい。大丈夫よ、この程度」

「わかりました」

《ちよつと待て！ これ持ってけ!!》

気づくと、ドレイクを乗せたヘリが三人の上空へ来ていた。ドレイクは上空から大きなジュラルミンケースを取り出し、投下した。

「プツ!!」

ジェンナーはケースを撃ち落とそうとしているのか、弾丸を吐き出した。

だが、ケースからはかろうじて外れた。

「受け取りました！」

紙の力でキャッチした読子は大きなジュラルミンケースを受け取った。

《よし、下から攻撃食らっちゃひとたまりもねえから、一時退却だ!》

「はいー」

読子が受け答えると、ヘリは遠くへ離れていった。

「本当にいいんですね？」

読子は改めてナンシーに確認を行った。

「いいから早くー！」

「わかりました…ナンシーさん、気をつけてください」

心配そうな読子だったが、見渡すと洞窟が見えた。読子はそこへ駆けていった。

「…とはいえ、あたしじゃ倒せるかな、コイツ」

《おい、ナンシー！》

ドレイクからの無線だ。

「なに？」

《あと三十秒したら、ヤツの身体を三時の方向に向けさせろ！》

「…なにそれ？」

《いいから！ それから、俺の合図で透明化しろよ？ わかったか！》

「あーも、わかったわよー！」

一方的な通信だったが、おそらく勝機があつての連絡だろう。

「フン！ 戦闘中に独り言とは、なめられたモノですね」

同じ場所に何発か銃弾を発射する。

「同じ場所に穴などできませんよ、プツ！」

「ハッ！」

段々と敵が繰り出す唾弾丸の速度が速くなっている気がした。

「まずいわね…、ならー！」

ナンシーは息を止めると、地面に潜り始めた。

「？ なんですか？」

手を振ってナンシーはその場から消えた。

「逃げる気ですか！」

背後から銃声が聞こえる。

「だから聞かないと言ってるでしょう!!」

何発弾丸を浴びても、ジェンナーは怯まない。

「そこです！」

ジェンナーの変化した右腕のハサミが空を切る。

「ちくしょーっ!!」

ジェンナーは暴れ回っている。

「はあい」

「見つけましたよお！」

ナンシーの首筋にハサミでガツチリと掴んだ。

「捕まえましたあ、これで終わりです」

ゆつくりとハサミの力が強まっていく。

《今だ！》

ドレイクの無線を合図にナンシーは改めて空気を吸い込み、透明化を発動した。そして、掴まれていたハサミがたたまれると、次の瞬間、巨大な射撃音が辺りに木霊した。

ナンシーは、ゆつくりと地面から出てきて、小刻みに息をしながら、ジエンナーの頭部は跡形も無く吹き飛んでいる事を確認した。

「はあ…はあ…、全く、こういうの嫌なのに」

《…とはいっても対処法あったか？》

アンチマテリアルライフルを装備した、ドレイクが奥から出てきた。ヘリから急降下して、指定した方角で待機していたのだ。

「…ないわね。おかげさまで助かったわ。読子を追いかけましょう」

「ああ」



「キシヤアアアア!!」

「おい！ こいつらキリが無いぞ！」

ヴィータとシグナムは洞窟に群がるインマウスの怪人達と攻防を繰り返していた。

「弱音を吐くな、ヴィータ！」

シグナムの斬撃が木霊する。

「レヴァンティン!!」

『Explosion』

シグナムの持つていた剣が反応する。

「紫電…、一閃!!! デエエエエイ!!」

百体はいたであろう集団目がけてシグナムが剣を振りかざすと、その一団は跡形もなく消し飛んだ。

「進むぞ」

「ああ」

「はあい。守護騎士さんたち」

進んだ先に妖艶な女が立っていた。見るからに怪しい。

「なんだよ、今あたしたちは急いでるんだ、邪魔するなら、力尽くでも退いてもらうよ！」

ヴィータはアイゼンを振り、威嚇する。

「おー、怖い怖い。そんなんじゃ、はやてちゃんに嫌われちゃうよ？」

「!! どうして、主はやての名を!」

シグナムは手に持ったレヴァンティンを引き抜こうとした。

「ダメダメ」

「っ!!」

耳元で囁くように女の声がする。

「ボクの名前は、ナイア。ヨロシクね」

二人に向かつて礼をすると、ナイアは地面に手を置いた。ズルリという音と共に、はやてとリインを取り出した。はやての手には魔導書がくつつている。

「ほーら。君達が希望してた子でしょ?」

「はやて!」

「ヴィータ、落ち着け!」

今にも飛び出しそうなヴィータの肩を抑えて、シグナムはナイアを睨みつける。

「我が主、返してもらおうか」

剣を引き抜き、ナイアに向けて突きつける。

「あはっ、でもボクを倒せるかな?」

パチンと指を鳴らすと、自分達がいた場所が大きくすり替わった。

8. ナイアの罠

「!? ナニは」

目を覚ますと、ヴィータとシグナムは先程とは違う場所に寝ていたことを知った。

「……ここはね、ちよつとした疑似空間さ。ほら、そこに九郎くんやアル・アジフ、読子とかいう子もいるだろ?」

ナイアの声の方向を見ると、先程別れたはずのデモンベイン、そして、読子がジュラルミンケースを持って、おかしな浮遊大陸へ立っていた。

「面倒だから一箇所に閉じ込めてもらったのさ。さて、これから何して遊ぼうか?」

『遊ぶだと? 悪いがそんなヒマねえつての! 先手必勝オ!』

人のサイズをしたナイアに向かって、デモンベインで殴りつける九郎だったが、白いリベル・レギスの手に阻まれる。

『くっせ、またか!』

「あははははっ、中身はないけれど、それはボクの駒なのさ」

ナイアはほくそ笑みながら、三ツ目の顔へと変貌していく。

『おい! 守護騎士のお二人さんに読子さんよ、ちよつとばかし力を貸してくれ。目の

前にいる女の動きを止めてくれるだけでいい!!』

九郎は他の全員に指示をした。

「え? え? なんですかあここお?」

読子はキョロキョロと辺りを見回す。ナイアの近くに見えたはやてを見つけると、ジュラルミンケースを開いた。

「はやてちゃんを返して下さい!」

「なんだか知らないけど、わかったよ!」

「承知した」

ヴィータとシグナムは自分の武器のチェックに入っている。

『おい、九郎! まさかこんな狭い場所でアレを出す気か!』

心配そうにアルが質問を投げかける。

『さすが、我が嫁わかるじゃねえか!』

アルの背中をバシッと叩く。

『バカ者! そんなことをすれば、デモンベインにいる我らはよくても、他の者達が巻き添えを食ってしまうではないか!』

『そりゃなんとなくだけど、大丈夫な気がしてんだ』

『大丈夫って…』

「ゴホン、夫婦の会話は終わりでイイかな？」

会話の内容が途切れないように待っていたかのようにナイアは話しかけた。

『ああ、お前を捕まえる鬼ごっこの開始だ！』

「てえええええええい!!!」

「アイゼン!! 続けえ!!」

『Jawohl (了解)』

読子の操る大量の紙がナイアを襲い、同時にヴィータの放つアイゼンが鉄球を打ち出した。放たれた紙と鉄球はナイアのいる場所へ打ち込まれていくが、どちらも手応えがない。

「なんだよ、その程度？」

ナイアはあっさりと避けており、やれやれといった表情だ。

「ならば、これはどうだ！」

『Bogennform』

音声と共にシグナムのレヴァンティンが変形していく。

「オオオツ!! 翔けよ、隼ッ！」

『Sturmfallen』

シグナムが放った一筋の矢がナイアを貫く。

「おおおつ、効いたよソレ」

大穴が開いているにもかかわらず、冗談交じりでナイアはつぶやく。

「ヴィータ!!」

「ああ、任せとけ! やるぞ! アイゼエエエン!」

『G i g a n t f o r m』

グラーフアイゼンが巨大化し、大きなハンマーの形へと変形していく。

「今度はモグラ叩き? 面白いね、その武器」

「ここです! でええええええやあああああ!」

読子がありつたけの紙を結合させ、ナイアの身体に巻き付けた。

「ありや? 捕まっちゃった」

ナイアは簧巻きのようにくるまると、もぞもぞと芋虫のような動作をした。

「ごおおてん、ばあああくさい! ギイガントオシユラアアアアアク!」

ヴィータが巨大な、グラーフアイゼンを振り下ろした。読子は防壁を紙で作り返処、

シグナムも即席の防御壁を作り、踏みとどまった。

「やったか?!」

「ふーむ、まだまだ甘いよー」

フワフワと首だけになったナイアは溜息をつくような顔になった。

『今だツ、アトラック!!ナチャ!!』

「なっ、大十字九郎!? 君の出番はもう少しあとじゃないの?」

『んなもん、知るか!!』

デモンベインから蜘蛛の糸がナイアに向けて発射され、見事ナイアの首を拘束した。

『さあ、ハネムーン旅行としゃれ込むぞ、ババア!!』

デモンベインは疑似空間を飛翔し始めた。白いリベル・レギスも追従するが、追いつけない。

『アル!』

『もうどうなっても知らんぞ! 最終必滅兵器シャイニング・トラペゾヘドロン!!』

『うおおおおおあつ!!』

デモンベインが金色に光り輝いていくと、天井の空間からシャイニング・トラペゾヘドロンを取り出した。そして、アルと九郎は、二人で言葉を紡いでいく。

『祈りの空より来たりて!』

『切なる叫びを胸に!!』

『我らは明日への路を拓く!!!』

『汝、無垢なる翼、デモンベイン!!!』

一気に手に持ったシャイニング・トラペゾヘドロンを振り抜く。

「やめろおおおおお!!!」

ナイアの断末魔が聞こえ、同時に白いリベル・レギスも飲み込み、そして、疑似空間が崩壊していった。

9—1. それぞれのエピローグ

「おい、ヴィータ起きろ」

「ん…」

目を覚ますと、シグナムが横に立っていた。

「なんだよ、シグナムもうちよつと寝かせろよ…」

「寝ぼけるな、ここはどこだ？」

「え？」

目をごしごしとこすると、そこは洞窟の中だった。

「そうか、あたしらおかしな空間から脱出できたんだな…。はやて！ はやてはどこだ

!？」

「ここだ」

シグナムが抱きかかえる形で、はやてはすやすやと眠っていた。ポケットにはリインもいる。問題になった本も一緒に抱えていた。

「いたっ！ いたいですう〜」

読子の声が暗闇から聞こえてきた。

「読子せんせー、どこだ〜」

ヴィータが魔法を使い、火の玉サイズの光球を近くに照らし出すと、四つん這いになった状態で、読子が右往左往と捜し物をしている所だった。

「すみませえん、メガネを探してもらえませんかあ〜」

「せんせーのパンツ見えてるし、どんな体勢で捜し物してんだよ。あんたの足下にあるぞ?」

ヴィータは近づいてメガネを拾ってから、受け渡す。

「ほい」

「ありがとう、ヴィータさん。：ひっ！ なんですかあここは!?!」

手元の光が、先程の戦闘で斬った相手を照らし出していた。

「あー、こいつら、魚人みたいだぜ?」

「おそらくナイアという曲者に惑わされた者もいるのだろう…」

斬ってしまった相手に対して、寂しそうな目を浮かべるシグナムだった。

「おーい!!」

九郎の声が入り口から木霊する。九郎の後ろをアルやナンシー、ドレイクもやってきた。九郎の足下には、

「良かった。これで全員無事みたいだな、はやてちゃんも助け出せたみたいだし、万万歳

だ」

「おかげさまでな。しかし、すげえもんぶつ放したな、九郎のにーちゃん」

「少しばかり危険は伴ったが、やっぱなんとかなったろ？」

「うつけが。こちらで多少の制御をしておらねば、危なかつたらうに……」

「大十字九郎、アル・アジフの言う通りだぞ？」

暗闇の奥から聞いたことのある老人の声があった。カツカツとしつかりとした足取りで現れたのは、ラバン・シユリユズベレイとハズキだった。

「ラバン先生！ いらしてたんですか！」

九郎の顔が明るくなる。

「奥にいた残党は始末しておいた。お前達には戦う余力は残っておらんだろうしな」

ラバンの笑顔が暗闇でも眩しく感じた。

「あはははは、ありがとうございます」

冷や汗をかきながらも、この人すげえなんて心底思う九郎だった。ラバンは、はやてが抱えている魔導書を手に取る。

「この本は……今ここにいるお前達以外の陣営が欲しているというのも把握している。こちらで取り分けられるよう、細工を施しておこう」

「イエス、ダディ」

ラバンはハズキに手渡すと、数分も経たないうちに、まったくうり二つの本が出来上がった。

「これでよし。まずは、大英図書館にはコレだ。魔術の力がなくても開けるようにしておいた。他の本と変わらん」

「本!!」

待ってましたとばかりに読子が奪い去った。すぐに読み耽っている。ナンシーもドレイクも頭を抱えている。

「…続いて、この本を守護騎士とやらにお渡ししよう。呪いの効果は先の戦闘でなくなつた。届けるにしても、問題の無い状態だ」

「ありがとう、ジーさん」

「…ダディはジーさんじゃない」

本を渡す手前でハズキがヴェータに食い下がる。

「ハズキ! 別に年齢は気にしておらんぞ?」

「…イエス、ダディ」

寂しそうにするハズキの頭を撫でるラバンだった。

「すまないな、これでもいい子なんだが…」

「気にしてねえよ」

無事に本を受け取ると、ラバンは来た道に戻ろうとしていた。

「…では、私達はまだ調査があるので、これにてな」

「はい、また！」

一同がみな、ラバンに一礼をした。

「…大十字九郎よ、できれば次に会う時は君がトラブルの渦中でない事を祈る」



「はいはい、こんな風にいじつても、また負けだよ！」

黒いナニカこと、ナイアルラトホテップはどこか暗闇の、もつと暗闇にある虚空を見つめていた。

「まー、それでも少しは楽しめたかな？ うーん、パンチが弱かったかな？ やっぱり巨大メカ戦をもつと増やすべきだったかも？ あるいは魔法少女の連中をこてんぱんにしてから、やればよかったかな？ 次はもーつともーつと、苦戦するように仕込みが必要になるかなあ？」

誰に対してもなく、独りごちる。

「あー、そうだ、次こそはこんな風に見してみようつと。面白いアイデアが浮かんだし、何より愉しめそうだ！」

何かを閃いたかのように掌を叩く。

「ふふふつ、愉しみだなあ」

彼、もしくは彼女が練る次なる世界はなんなのか、それはそれは先の話。

9—2. それぞれのエピローグ

あれから一ヶ月が経過した。手に入れた魔導書は時空管理局が保管する事となった。ラバンと別れた後、すぐにイギリスへ帰還した。そして、それぞれの道へと帰っていった。

読子は相変わらずここ神保町の自分の部屋で本を読み続けている。そんな彼女にジョーカーから電話が入った。

『読子、おはようございます』

「おはようございます。今いいところなので、あとでもいいですか？」

『ダメですよ、読子。大至急、イギリスへ帰還して下さい。緊急事態です』

「えーっ、あとちよつとなんですよお〜」

『あなたのあとちよつと、は大抵三時間以上かかるので、今回は強制的に執行させて頂きます。ドレイク君』

その言葉の後で、ガチャとドアが開く。そんな音に反応しても、顔は本を向いたままだ。

「おい、読子。早く行くぞ、支度しろ！ ……って、お前なんだって下着のままなんだよ」

頭を抱えるドレイクをよそに、読子はブラジャーにパンツのみという姿で本を読み耽っていた。

「えー、だって、減るもんじゃないんですし、いいじゃないですか。それよりも…あっち向いてて下さい」

「つたく…三分待つからな、それ以降は強制的に麻酔薬でもなんでもぶち込むぞー」

「はい」

本を持ったまま、相変わらずのペースで着替えをする読子だった。



「ココに来て登場！ ドクタアアアアアウエエエエエエストオ!!」

ギターをかき鳴らし、大十字九郎探偵事務所に殴り込みをかけたこの男は、その名の通り、ドクターウエスト。今回、出番が無いからか、既に事務所に帰ってきた晩にも襲撃をしてきた、誠めんどくさいキャラである。その時もすぐにボコボコにして退散してもらっていた。

「げっほげっほ。おい、うっさいぞ、このマッドサイエンティスト」

「そうじゃ、少しはゆっくり寝かせろー！」

「フン、この程度、騒音でもなんでもないのであるっ！」

パンツ一丁で頭が焦げ、普通の髪型からパンチパーマへと変貌した九郎と、

ネグリジエ姿のアルに、吼えられても、ギターをかき鳴らすのをやめないウエストだった。

「ダーリンずるいロボ！　こんな古本娘よりもよりグラマラスな、このエルザにも快樂を教えて欲しいロボー!!」

ウエストが造った人造人間であるエルザも、もじもじと恥ずかしがりながらウエストとを押しつけるように乗り込んできた。

「あーもーめんどくせえな！　アル、行くぞー！」

「なんじゃー！　せつかくいい感じじやったのに、この怒りを彼奴らにぶち込めば良いのじゃな？」

「ああー！」

九郎とアルは両目に炎を燃やし、いつもの口上を口ずさんだ。

「憎悪の空より来たりて……」

「正しき怒りを胸に……」

「我らは魔を断つ剣を執る！」

「汝、無垢なる刃！　デモンベイン!!」



ヴィータとはやては、二人で家までの帰り道を歩いていた。

「はー。もうあそこには行きたくねえな…、魚介類とマズいメシは勘弁だ」

「せやな、私もまたああいう経験するのは御免や」

二人ともうんざりしている。

「そういやさ、はやて。アイツら、今頃何してるんだらうな？」

「さあ、私を助けてくれたみたいなのに、困っている誰かを助けたりだとかしとるかもね」

短い間ではあったが、おかしなメンツでパーティーを組んでいたものだと、改めて思う。でも、また会ってみたいそんな事も思えた。

「読子せんせーとはまた会えたんだろ？」

「それがな…」

はやての声のトーンが下がる。

「実は、他の学校に行ってしまつてん。私に正体がバレたからなんかな…わからんが」

「し、しっかりしろよ、はやて！ あたしや、シグナム達だつているだろ？」

ヴィータは寂しそうな顔をする、はやてを慰めるように声をかけた。

「そうやね、じゃ、今日はヴィータの好きなハンバーグ作るか？」

「マジで!？」

「マジも大マジや」

満面の笑みを浮かべるヴィータの手を取り、はやては手を繋いで歩き出した。